

子育て支援広場における実践的学び —保育者の人間関係が環境に与える影響とは—

勝間田 明 子

1. はじめに

本稿では、幼児研究所の主催で今年度からスタートした0-1歳児とその保護者を対象とした子育て支援事業「あかちゃん広場」について報告する。

この事業の目的は、①本学の地域貢献の在り方を探ること、そして②保育者の担う保護者支援について学内で実践的に学ぶこと、の二つに大別できる。とくに前者は、子育て中の保護者同士の交流・憩いの場を創りながら、同時に地域の子育て家庭の実態に触れ、その課題を発掘することとして具現化される。そして後者は、保育専攻の学生が学内において保育実践をおこなう場を創ることによって実践的学びを積み重ね、その資質向上を図りたい、という教育的な意図も持っている。

開始年度である2016年度は、本学の専攻科保育専攻1年次のカリキュラムに位置づくレクリエーション・インストラクター資格取得の必修科目である「レクリエーション理論」および「レクリエーション実技」の授業内容を一部改編し、この子育て支援事業における実践を中核として構成し直して、これらの授業の受講生と教員2名(レクリエーション理論および実技の指導担当教員および幼児教育研究所顧問)を中心として準備にあたることとした。

なお、前年度におこなうべき施設整備や物品購入・広報等の準備は、担当教員が幼児教育所委員会にて立案し、協議を経て承認を得た後に、教授会にて報告され、承認を受ける、という手続きに沿って進められた。

以下では、レクリエーション・インストラクター資格および資格取得のための授業について簡単に触れた後、本学周辺の地域課題に対する認識を明らかにし、子育て支援事業のなかでも「ひろば型」に類する事業形態を選択した理由を記す。そして新設した「あかちゃん広場」の事業理念と運営方針、事業計画を載せ、現在の事業遂行の状況や参

加者の声、そして、学生たちの学びの一端を紹介し、今後の課題を考えたい。

2. レクリエーション・インストラクター資格および資格取得のための授業について

専攻科保育専攻にて、レクリエーション・インストラクター資格を取得できるカリキュラムが新設されたのは昨年度のことである。

この資格を取得するためには、「レクリエーション理論」の講義において、レクリエーション運動の歴史や支援に関する知識、事業計画の立て方や安全管理等、を幅広く学修すること、そして「レクリエーション実技」の講義では、アイスブレイキングの考え方と基礎技術、対象や目的に合わせたレクリエーション・ワークや素材の選び方、アレンジ方法等を実践的に学修することが求められる。

今年度は、上述の「対象や目的に合わせたレクリエーション」を考える際に、その対象を0-1歳児とその保護者、目的を参加者同士の交流とし、学修方法を「あかちゃん広場」での実践と省察によって学びを深めることとして、子育て支援に焦点化した授業計画を立てた。

その演習は、具体的には以下のように進められる。まず、子どもとその保護者の触れ合いおよび参加者同士の交流を図るためのプログラム・環境構成について考え、事前に準備を重ね、「あかちゃん広場」開催時にその計画に基づく実践をおこなう。そして実践後に、片づけ・掃除をしながら、その日の気づきを語り合うことを通して、振り返りのための準備をする。そのうえで、カンファレンスを開き、その回の成果と課題を共有して次回以降の準備・実践に繋げる、という3段階を1つまとまりとして扱い、1回1回を完結させながら、参加者同士の関係の育ちを常に意識し、長く考え続けることによって、螺旋階段を上がるように保育実践力の向上を目指すこととした。

3. 本学周辺の子育て家庭が抱える課題

本学の位置する昭和区の桜山学区は、名古屋市の中心部である栄や名古屋駅へのアクセスが良く、治安の良さと地形的なアップダウンが少ないことも手伝って、子育て家庭に非常に人気のある文教地区である。

このことはインターネット等の各種メディアによって、市外・県外にも広く知れわたるところとなり、特に名古屋市に転入する子育て家庭が選ぶ居住地としての人気が高い地域である。このことは、生まれ育った地元を離れて、慣れない土地で「孤立」して子育てに向き合っている家族が少ない、ということの意味するものでもある。もちろん核家族ではなく、三世帯で暮らしている場合もあるが、その場合も、自分の子育てについての考え方や方法が家族全員に理解されないこともあり、違う意味で「孤立」と戦っているという話もよく耳にする。

また、それと同時に文教地区ならではの問題として、子どもを大事に育てたい、子どものことをもっと知りたい、という学習意欲の高い保護者が多く、知的な要求も非常に高くなっている、ということも挙げられよう。これは、今年度、本学と昭和区生涯学習センターの共催で実施している有料の子育て支援講座に定員の2-3倍の応募があったこと、からも窺い知ることができる。

したがって、当該地域の子育て家庭の抱える問題は、「仲間づくり・居場所づくり」と「学習支援」の両方の要求を満たすアプローチを必要としていると言えることができよう。この地域課題をともに担うために、下で説明する「ひろば型」に類する事業を新設することとした。

子育て支援拠点事業の「ひろば型」とは、厚生労働省の定義によると「常設のひろばを開設し、子育て家庭の親とその子どもが気軽に集い、うち解けた雰囲気の中で語り合い、相互に交流を図る場を提供」する、ということである。今年度の取り組みは「常設」ではないものの、同様な目的・雰囲気のある場所を提供することを企図しているので、新設の事業も「ひろば型」に準ずるものと考え、「あかちゃん広場」と名付けている。

なお、事業を立ち上げるにあたって、最も重要視したことは、①仲間づくりやリラクスのでき

る時間・空間を提供するために、子どもとその保護者の双方がのびのびと寛げるような環境構成をおこなうこと、そして②スタッフや教員だけでなく、保育士資格・幼稚園教諭2種免許状を取得している専攻科学生も事業に参加することで、若い世代にとって親しみやすい雰囲気をつくること、の2点である。もちろん、他の参加者との積極的な交流が難しい場合も考えられるため、そういったケースには教員を中心として個別に対応し、臨機応変にサポートをする。

これらの2つを柱として、地域の子育て家庭の抱える課題の一つひとつを、丁寧に解きほぐしていくことをが本学に求められているのだと思う。ともに感情や思考を整理していくことによって、ご家庭のそれぞれの思いや主体性を尊重しながら、その心の重荷を少しでも一緒に担えるようなお手伝いを地道に進めていきたいと考え、子育て支援事業の中でも参加者にとっての「居心地のよい交流の場」を創ることを主眼に置いた「あかちゃん広場」を新たに開設することとしたのである。

4. 「あかちゃん広場」の活動理念

この子育て支援事業「あかちゃん広場」の活動理念は、本学の建学の精神である「愛をもって仕えよ」を中核とする。

この「愛」とは、「自己中心的なものでなく、自己を惜しみなく与える愛」であることは言うまでもない。それでは、この「仕えよ」という言葉の目的語、そして主語は誰／何だろうか。「仕える」のはわたしたちであるが、仕えるべき「主人＝主体」は、子育て家庭であり、その子どもであり、その保護者であろう。

「あかちゃん広場」では、すべてのスタッフが、①「愛」とは何か、②「仕える」とはどういうことか、という2点を常に自らに問いかけながら、子ども・保護者の心に寄り添い、喜びや苦しみをともにしていく。そして同時に、わたしたちの持つ子どもの発達の知識やカウンセリングマインド等の相談援助の手法といった専門性を活かし、その人、ひとりひとりに「ちょうどよい」支援を探りたいと願って、環境構成とプログラムの検討をおこなう。

5. 「あかちゃん広場」の事業計画

今年度の「あかちゃん広場」の事業計画は以下のとおりである。

内 容 : 0 - 1 歳児とその保護者の方がゆったりと楽しく集う場所・時間の提供
(仲間づくり・育児相談)

開催日 : 5 ~ 7 月、9 ~ 12 月の 火曜日
(前期 5 回、後期 5 回、合計 10 回)

- 前期 ① 5 / 10、② 5 / 24、③ 6 / 7
④ 7 / 12、⑤ 7 / 26
- 後期 ⑥ 9 / 13、⑦ 9 / 27、⑧ 10 / 25
⑨ 11 / 15、⑩ 12 / 6

開催時間 : 10 : 00 ~ 11 : 30 (開場は 9 : 45)

- プログラム 10 : 00 ~ 自由遊び
10 : 20 ~ 一斉活動
(学生による企画・実施)
- 10 : 50 ~ 自由遊び (~ 11 : 30)

定員 : 20 組

参加費 : 無料

募集方法 : 本学ホームページでの情報公開と案内チラシの設置および配布。
(近隣幼稚園での配布、昭和生涯学習センターの情報コーナーへのチラシ設置を依頼する)

今年度の「あかちゃん広場」は通年で 10 回の開催を予定しているが、第 3 回以降は定員の 20 組をはるかに超える申し込みがあり、開設曜日を増やしてほしいという嬉しい要望も数多く頂いている。また、保育専攻の学生がこの「あかちゃん広場」の準備と運営に携わることによって、本科における実習で不足しがちな子育て支援に関する知識や技術を実践的に学んでおり、回を重ねるごとに目覚ましく成長する様子を看取できる。その学びの内容については、後に事例を挙げて述べてたい。

ここで特筆すべきは、参加者の方々の笑顔と感謝の言葉によって、レクリエーションによる支援をおこなおうとしている学生たち自身の主体性が引き出されていることである。このことは、レク

リエーションの創る嬉しい好循環を、喜びとともに、実感を通して学んでいるということになる。

さらに、回を重ねるごとに、個人の資質の向上だけでなく、受講生 5 名が集団として力をつけてきており、協調性も磨かれている。実感を通して学んだ仲間と助け合い、補い合うことの心地よさを基盤にして、これからもこの好循環を活用しながら、今後も学修をすすめていきたいと考えている。

6. 「あかちゃん広場」の運営方針

この事業を運営するにあたって、以下の 3 つの点を基本方針として掲げている。

第一に、地域の子育て家庭の潜在的な学習要求も掘り起こしながら、子どもがいきいきと育ち、その保護者が子どもとともに創る生活のなかに大きな喜びを見出すことのできるような「環境醸成」をおこなう。

第二に、「求めに応じた支援」をモットーにし、わたしたちの願いや思いを押しつけるのではなく、それぞれの子育て家庭の抱えている課題について、その気持ちに寄り添いながら、ともに解決の方法をさがす。

第三に、本学の保育学・幼児教育学・心理学・児童福祉学等の教員の有する専門的な知識や人脈等を活かし、必要に応じて学外の専門機関とも連携することも視野に入れながら、全学を挙げて「他人ごとではなく、自分事として」、それぞれの家庭に必要な支援に尽力する。

この 3 点を常に念頭に置き、地域の子育て家庭の平和が保たれ、その学習要求が満たされるよう、着実に歩みを進めていく。地域に根差す短期大学が、その専門性を活かして有意義な活動を生み出すことができるよう、また地域の方々から学びながらわたしたちも成長できるよう、この活動に関わる一人ひとりが常に向上心を持って、自己研鑽に励むこととする。

7. 0 - 1 歳児が集うことに対する配慮

「あかちゃん広場」事業の対象児は 0 - 1 歳であり、この時期の赤ちゃんの発達スピードは劇的である。0 - 1 歳児の身体能力や活動の状況は、首が据わったばかり・腰が据わったばかりの赤

ちゃん、ハイハイを始めたばかり・伝い歩きを始めたばかりの赤ちゃん、よちよち歩きが上手になった赤ちゃん、等々、月齢差と個人差が非常に大きい。

とくに月齢が小さい赤ちゃんの保護者が、活発に歩き回る子どもたちとともに同じ室内で過ごすことについて、不安を感じることはないよう保育室の物的環境をうまく利用し、遊具等の配置を工夫する。そのことによって、子どもたちの発達状況に応じた環境のアフォーダンスを考え、動線を作り出すことで、危険を未然に防ぐとともに、不安感を与えない配慮をする。

保育室は、柵が全て作り付けになっており地震等で倒れてくることはない。これは安心して過ごすために重要な点である。また、そこに集うすべての人が落ち着いて穏やかに過ごすために、色彩環境や音環境にも十分に配慮されており、壁の片面に並ぶ大きな窓からは太陽光の加減、空の色、雲の形を眺めることができ、その窓から見える小さな畑に育つ野菜や花は、保育室に自然の豊かな色彩を添えている。この調和を乱さないように、細心の注意をしながら、壁面飾りや玩具の色合いを熟考している。

保育室内では、各自が持参する水筒やマグによる水分補給と授乳スペースでの授乳のみを可能とするが、これは食物アレルギー児を抱え、除去食に苦労している保護者にとって、特に、なんでも口に入れて確かめたい0-1歳の時期の子どもとともに、安心して憩うことができる優しい空間を創るための配慮である。このことは、少数が多数に合わせて我慢することを当然視することに異を唱えるものであるとも言えよう。

なお、子育て広場での活動の様子は、その回が終了してから2週間以内に、本学ホームページの子育て支援のページにPDFファイルとブログ形式で掲載し、参加者以外にも活動内容と雰囲気が伝わるような取り組みをおこなっている。

8. 「あかちゃん広場」参加者の声

複数回の参加者が多くなり、参加メンバーがほぼ固定されてきた第5回(7月26日)、第6回(9月13日)、第7回(9月27日)に、自由遊びの時間を利用して、このあかちゃん広場に関する意見・

感想・要望等を、インタビュー形式で聴取した。第7回を終えた時点(9月30日)で、毎回の申込者数は25組程度、参加者数は18組前後であるが、そのうちの15名の保護者から意見を聴くことができた。

収集した意見を、1) 闊達な交流をうむ環境構成(空間・時間、設備・玩具、スタッフ等)、そして、2) プログラムの内容、として二種類に大別し、さらに以下のように細かく分類した。

1) 環境構成について

●空間的環境、時間的環境、物的環境および他の参加者との交流について

- ・天井が高く、明るいので、楽しく話をすることができる。
- ・広いので、家よりも活発に動き回る様子をみることができる。
- ・広さと参加人数がちょうどよく、雰囲気が良いので、他の参加者と交流しやすい。
- ・危険なものや、触ってはいけないものが無いので息抜きになり、リラックスできる。
- ・家では買えない玩具がたくさんあって、子どもが楽しそうに遊んでいる。
- ・子どもと同じくらいの月齢や、少し上の月齢の子どものお母さんと話ができ嬉しい。

●人的環境について

○毎回同じ学生がスタッフとして常駐すること

- ・学生さんの雰囲気が優しい。
- ・学生さんと子どもが遊ぶ姿をみられることが嬉しい。
- ・学生さんたちをはじめ、いろんな人と触れ合えることが嬉しい。
- ・学生さんが優しく遊んでくれるので、子どもをまかせて、自分がお母さんたちと話ができるので気分転換できる。

○2名の教員が常駐すること

- ・ハイハイの悩みや離乳食、食物アレルギーの不安を相談できて嬉しい。
- ・子育てのプロの先生方と話すことで、安心して子育てができる。

2) プログラムの内容について

- ・学生さんの手作り玩具を紹介してもらって、実際に家で作って遊んでいる。
- ・手遊び歌やふれあい遊びを紹介してもらえて、家での遊びのヒントになる。
- ・ふれあい遊びのときに子どもが喜ぶ顔をみると嬉しくなる。

上記の結果から、①開設場所の広さ・明るさ、②発達の知識に基づいて検討・用意された豊富な玩具・遊具と一斉活動の内容・時間設定、③スタッフ(学生および教員)の雰囲気と専門性(この専門性は②として具体化されている箇所でもある)が高く評価されていることがわかる。

もちろん、このような意見収集の方法では肯定的な意見しか聴取できないという難点があり、今後は無記名での質問紙調査等を利用して、より利用者の視点に立った事業改善を検討することが必要になってくると思われる。ただし、この結果で「あかちゃん広場」の実践に込められた願いが参加者に届いており、一定の支持を受けていることがわかったことは、専攻科学生の自信となり、今後の実践の糧になっていくことは間違いないだろう。

9. 理念と活動を架橋する実践と省察

(1) 「一斉活動」という語感に引きずられる言動

上述のインタビューの結果にも表れているように、この「あかちゃん広場」の活動をおこなううえで最も大切にしていることに「優しい雰囲気」を創りだすこと、がある。その雰囲気づくりの中核をなしているのが、人的環境としての保育者=学生たちの言動や立ち居振る舞いであろう。

「あかちゃん広場」では、豊富な玩具や絵本を媒介として子どもたちと関わりを持つ中で、その発達の状況や興味関心のあり方を探りながら、自由遊びを中心としてプログラムを組んでいるが、10時半頃から20-30分程度、ふれあい遊びや手遊び等を「一斉活動」として企画している。その活動への参加は強制的なものではないが、学生たちの中には「一斉活動」という語感によって「一斉に活動しなくてはならない」という強制感を伴うイメージが喚起されていることが、この実践を通

して明らかになった。

初回は、歩き回っている子やほかの遊びを続けながら参加をする子どもたちを温かく見守ることに学生たちは戸惑いを覚えたようであり、そのような子どもの姿を、自分たちの保育技術の不足が招いた「子どもの集中力を引き出せないこと」の結果として捉えていた。そして事後のカンファレンスでは「子どもと保護者に活動内容を大きな声で伝えて、遊び方の説明が聞こえるようにしなければならない」という反省や「自由遊びの後、玩具を速やかに片付けて、活動に集中させる」という案が口々に出されることになった。

「あかちゃん広場」では、「そこに集う人のそれぞれのペースを尊重し、強制や強要は一切おこなわない」ということは、何度もお互いに確認し合っているが、それにもかかわらず、学生たちは実際に自分が現場に立つと、頭で理解しているはずのことと行動が矛盾していることに気づけない。自分の思い通りに物事が進まないことに焦り、それを自分の声の大きさや参加者の姿勢の問題として矮小化し、解決を図ろうとすることは、先に活動理念の部分で触れた「自己中心」の問題である。「大きな声」で解決できる問題ではない。

(2) 実感を通して学ぶ理念の具現化

そこで、学生たち自身がこの「自己中心」の問題に気づくために、次のような手順で、問題の所在を明らかにし、改善を促すこととした。

まず、①カンファレンスの際に、大声を出して説明すると参加者にどんな印象を与えるか、そのことがどんな雰囲気作りに繋がるか、活動の説明をする方法として1名が声を張り上げるというやり方以外で考えられることはないか、等、共有している具体的な場面を思い出し、参加者になったつもりで追体験をする。そして、②その場面をともに思い描いたうえで質問を重ね、そのときの学生の意図や想いに共感し、肯定することで、自己不全感に苛まれることのないよう配慮する。そのうえで、③対話的な関係の中で、この活動の本来の目的である「参加者の交流」と「それぞれの子どもがのびのびと楽しい時間を過ごすこと」を支えるための具体的な関わり方について、再考できるよう、丁寧に学生自身の中にある先入観を解き

ほぐしていくことに努めたのである。

とくに、この実践を通して学んで欲しいことは、自由遊びのときの関わり方だけでなく、一斉におこなう活動のねらいや願い、それらを表現する方法も含めて、自分の一挙手一投足が与える印象を相手の立場になって考えること、そして、自分中心に陥っていないかを何度も検討して注意を払うことの重要性である。それはつまり、無意識的な言動も含めて、自分自身を言語化して客観視し、自分の保育観を問い直しながら、自己研鑽に励む姿勢に繋がり、保育専攻の学びとして相応しいものであろう。

(3) チームで保育をおこなうこと

また、学生たちには、幼稚園や保育園実習で経験してきた「一斉活動」のイメージが強く刷り込まれていることや、「部分実習」のように実習生が一人で活動の説明をするような感覚で「役割分担」をすることを当然視しているので、チームで保育をすることが実感としてわからなかった、ということもこの実践から見えてきたことである。

とくに、子どもが保護者と同じ場所にいるところで保育活動をおこなうことに慣れていないためか、大きな声を出さずに活動内容を伝えることをなかなか想像することができず、先に触れた初回のカンファレンスの際は、やや腑に落ちない様子ではあったが、二回目は声を張り上げないで、5人で協力して活動内容を伝える方法を考え、活動を進めていく方法を考案し、試行してみるようになった。

その結果、2回目には、大きな声を出さなくても、一人ひとりが自分の周りの人にデモンストレーションをしながら説明すれば、活動が滞りなく進んでいくことを、身をもって知ることができたようである。これは、参加者を信頼することに繋がり、参加者から信頼されることに繋がる。初回は、むしろ、大きな声で活動を促すことによって、穏やかな雰囲気崩していたことに気づき、納得して今後の行動を考えることができるようになり、チームで保育をすること、つまり、主従関係のない協力方法について考え始めたのである。

そういった振り返りと試行を繰り返すことによって、学生は、優しく和やかな雰囲気を創るた

めには、細心の注意を払いながら保育者のすべての言動を、個人としてもチームとしても、その目的と照らして検討しなおす必要があることに気づき始めている。しかし、まだその意識が身体化するまでには至っていないため、気の緩みが出してしまうときも多々ある。今後、とくに必要なのは、仲間とともに注意し合い、話し合い、育ち合える環境作りを続けていくことだと思われる。

(4) 結果が可視化されることの長所

なお、このように意識して、ようやく醸し出すことができている和やかな雰囲気について、とくに印象に残っていることは、普段は場所見知りをする子どもが、この「あかちゃん広場」をきっかけに様々な場所へ出かけられるようになったというエピソードである。

この子どもとその保護者には、学生ではなく教員が個別に対応したが、初めて二人が「あかちゃん広場」を訪れたときには、子どもは室内の様子を気にしつつも、なかなか入室できず、長い間大声で泣いていた。しかし、終了時刻の20分前くらいになって少し母親から離れて遊べるようになり、ときおり笑顔も出るようになっていた。心配していた2回目には、何の抵抗もない様子で子どもは泣くこともなく積極的に入室する姿がみられ、その子どもの母親とともに喜び合った。母親によれば、これまで同様な親子交流の場にもなかなか入ることができず、諦めて帰路につくことばかりだったのだという。この経験によって親子ともに自信がつき、他の交流の機会にも参加できるようになった、とのことである。これは、比較的手厚く個別対応ができるスタッフの配置と「みんなと一緒に行動をしなければならない」という無言のプレッシャーを感じないこの空間の居心地の良さが功を奏した事例だと言えよう。

もちろん、逆に「あかちゃん広場」の雰囲気や活動内容に物足りなさを感じる保護者や子どももいるだろう。子育て家庭の抱える問題は多様であり、様々なニーズがあることや、自覚されていないニーズを掘り起こすことの必要性も踏まえて、これからの活動内容を検討していきたいと思う。

10. おわりに

この子育て支援事業「あかちゃん広場」は産声をあげたばかりである。今後、その事業を継続・発展させていくためには、その活動を丁寧に振り返り、成果と課題を析出して検討を重ねる必要があるのは言うまでもない。

また、昭和生涯学習センターとの共催で実施してきた子育て支援講座や、本科2年生のゼミナールごとに独自におこなっている各種の子育て支援

活動とも連携し、協力し合うことを通して、地域社会との信頼関係をより強固に築き上げていきたいと願っている。

「あかちゃん広場」が、学生および教員の保育実践力の向上を目的とし、地域に根差す短期大学としての社会貢献の途を探る教育・研究の拠点となり得る子育て支援の場として育っていけるよう、丁寧な実践と振り返りを繰り返しながら、弛むことなく誠実に歩みを進めていきたい。

A Teaching Report: How to Acquire Basic Knowledge and Skills through Practical and Experience-based Lessons in Childcare Support Programs

Katsumata, Akiko*

本稿では、幼児研究所の主催の新規子育て支援事業「あかちゃん広場」について報告する。この事業の目的は、①本学の地域貢献の在り方を探ること、そして②保育者の担う保護者支援について学内で実践的に学ぶこと、の二つである。2016年度は、本学の専攻科保育専攻1年次開講のレクリエーション・インストラクター資格取得の必修科目「レクリエーション理論」および「レクリエーション実技」の授業内容を一部改編し、この子育て支援事業における実践を中核として構成し直して、前期5回、後期5回の合計10回の事業開催日を設定した。

学生たちは、この「あかちゃん広場」を開催するための準備・企画運営・振り返りの中で、保育理念を具現化することの難しさに気づき、着実に実践力を身に付けてきている。とくに、保育者自身が環境の一部でありながら環境を創り出す存在であること、またチームで保育をおこなう場合の役割分担の在り方について、身をもって学んでいる様子が看取でき、この「あかちゃん広場」での実践が保育計画を立案する時や実践する時に、無自覚であった自分の言動を問い直す契機になっていると思われる。

キーワード：子育て支援, レクリエーション, 人間関係, 保育環境